

翻訳における芸術性の追求 ——ナイダ以後の聖書翻訳の動向と 文質論争後の中国翻訳史を比較して

北村彰秀

1. 前書き

翻訳論の祖とされるナイダは聖書翻訳の仕事にかかわる中で、dynamic equivalence（動的等価）（後に functional equivalence（機能的等価）とよばれるようになった）という新しい概念を打ち出し、翻訳の新時代を開いた。そして彼の提唱した原則にもとづき、いくつかの言語で、Good News Bible と呼ばれる聖書の訳が出版されるようになった。しかし、ナイダの新理論構築のあと、Good News Bible の翻訳においても、あるいはそれ以外の訳、また各国聖書協会以外においても、もっと芸術的な訳を作ろうという動きが起こってきた。

ここでは、聖書翻訳におけるその動きを、まず全体的に眺めてみたい。そして、それを、中国における文質論争と呼ばれる論争と、それ以後の中国翻訳史における芸術性追求の動きと比較してみたい。このような比較を行う理由は、まず、文質論争と呼ばれる論争は、芸術性にかかわる論争だからであり、また、それ以後、特に中国の近代以後においては、芸術性をも含めた形で、翻訳論が発展してきたからである。また、近代以後の中国の翻訳論はほとんど欧米には伝えられてこなかったと思われ、そのような面からも、両者の比較は興味深い。両者を比較することにより、それぞれの芸術性追求の特性がより明らかになっていくであろうし、また、地域、時代による制約も見えてくるかもしれない。また、翻訳における芸術性追求という課題がどの程度普遍的なものであるかも見えてくるであろう。

なお、ここで、なぜ「文学性」ではなく、「芸術性」という用語を用いたかについて、簡単に説明しておきたい。芸術というものは、大まかに言って、音楽、文学、美術に大別できるであろうし、言語における芸術性は文学あるいは文学性といった言葉で言われることが多いようである。しかし、言語を抽象的なものとしてとらえれば、抽象的な美しさや面白さがありうるであろうし、また、音声に乗った場合には、リズムや抑揚といった、音楽的な美しさがありうるし、また、目に見えるもの、書かれたものとなった場合には、視覚的な美しさや面白さというものがありうると思われるからである。このことは至極当然なことであるが、特に注目されないことも多いため、ここでは言語の文学性以外の芸術性にも目を向けてみたいと思う。

2. ナイダ以後の聖書翻訳における芸術性の追求の目覚め

ナイダは翻訳史において新しい時代を開いた。すなわち、意味にもとづいた訳をとらえ、

そして、彼の理論にもとづいた訳として、英語その他の言語で **Good News Bible** とよばれる聖書の新しい訳が出版された。(英語のものは **Today's English Version** とよばれる。) しかし、その後、もう少し直訳に近づけようという動き、スコプス理論を翻訳に生かそうという動き等が出てきたが、最も注目すべきは、訳文を文学的なものにしていこうという動きである。文学的な訳を作っていこうという努力は古くからあったと思われ、欽定訳 (**King James Version**) や日本語の文語訳などは文学的な訳であると言われているが、文学的な訳を作るためのノウハウといったものは残されていないのがふつうであり、また、残されていたとしても、それらを発掘するのも容易ではない。しかし最近では、翻訳者の勘 (かん) に頼るのではなく、文学的翻訳の理論を構築していこうという動きがあることは注目に値する。

Good News Bible はナイダの理論に従い、わかりやすい訳をめざしたものであるが、わかりやすさを追求したために、芸術性が犠牲になっていることは否めない。たとえば、1966年に出た初版ではヨハネ 1:1 「始めに言葉があった。」は次のようになっている。

Before the world was created, the Word already existed;

これでは原文の持つインパクトがほとんど感じられない。しかし、2004年の版では以下のようにになっている。

In the beginning the Word already existed.

ドイツ語の **Good News Bible** にあたる **Gute Nachricht Bibel** (1997年に出たが、その後、ドイツ語正書法の改定があったため、新正書法によったものが2000年に出た) は以下のようになっている、さらに文学的なものになっている。

An Anfang war das Wort. (始めに言葉があった。)

すなわち、状況は文学性の追求に向かっているようである。これは文学化ではなく、直訳化であると見る者もあるかもしれない。しかし、直訳化が文学性を増すことになる場合が少なからず存在することを忘れてはならない。また、以下にも記すように、ちょうどこのころ、各国の聖書協会以外でも、翻訳において文学的訳をめざす動きもあり、論文、著作も出ている。

Good News Bible の働きは聖書のスペイン語訳から始まった。そして、次に英語訳の働きが始められた。そのとき、ナイダの頭にあったのは、ラテンアメリカ、アジア、アフリカの発展途上国の人たちであった。すなわち、必ずしもスペイン語や英語を母語としない人たちである。発展途上国の人たちのためには、聖書の翻訳もやさしくしなければならぬとナイダは思ったようである。実際のところ、英語の **Good News Bible** は、原文以上にやさしくなっている。例えば、パウロの、肉のからだ、霊のからだ (コリント第一 15:44、聖書協会口語訳) という表現を、**physical body, spiritual body** と表現している。また、英語等の **Good News Bible** では、語彙数を制限している。確かに、英語を母国語としていない人たちにとっては、語彙数を制限した翻訳はわかりやすく、助けになる。われわれ日本人にとっても、**Good News Bible** は英語の学習上、非常に助けになる。しかし、語彙数を制限することは、いろいろな文学的表現の可能性を制限することにもつながることは確かだ

ある。オランダ語訳聖書になると、語彙数を制限しないという方法が採られるようになった。

Good News Bible の序文においては（最近の版ではこの序文はあとがきのところに置かれているが）、文学性ということは触れられていない。しかし、Good News Bible のナイダ的翻訳法をさらに発展させて作られたと思われる Contemporary English Bible（略称 CEV）の序文を見ると、“strives for beauty and dignity, as much as for accuracy and clarity”（正確さと明確さを追求するとともに、美しさと尊厳を追求し）とある。また、Good News Bible のあとに出た New International Version（略称 NIV）の序文を見ても、“an accurate translation and one that would have clarity and literary quality”とある。すなわち、文学性をも追求して訳したということである。おそらく、Good News Bible においては、わかりやすい訳を作ろうとするあまり、文学性が軽視される傾向があったため、それとは違って、文学性をも備えた訳を出すのだという意志表示であると思われる。Contemporary English Version はナイダの方法を継承しており、また、NIV はナイダ的方法はかなり弱まっているとの印象を受けるが、現在英語訳聖書として最も広く用いられている。（既に欽定訳をしのいでいる。）

ここで改めてナイダの翻訳論を見直してみると、ナイダ（1973, p. xi）においては次のような言及が見られる。

「翻訳が科学的処理のみで生まれるものではないという事実を見逃しているわけではない。翻訳は……つきつめていくと、……芸術的創造である。」

この言及の意味するところは、翻訳において芸術性は重要であるが、「翻訳—理論と実際」においてはそれは十分に扱うことができなかつたということであろう。

やがて、E. Wendland が登場し、論文等で文学的な訳を主張するのであるが、Wilt (2003) の中で彼は literary functional equivalence（文学的機能的等価）という概念を打ち出し、また Wendland (2004) においては、literary-rhetorical approach を唱えた。これら2冊はいずれも Summer Institute of Linguistics というところから出ているのであるが、このことから、彼の方法はかなりの程度、聖書翻訳関係者の間で受け入れられているものと思われる。

彼の説くところを簡単にまとめることはむずかしいが、あえてまとめるとすれば以下のようなであろう。

1. 原文の独特な表現は訳文でもある程度残す。
2. それぞれのジャンルの違いを訳文で反映させる。例えば法律の文章は法律の文章らしく訳す。
3. 受容言語 (receptor language) にある独特の表現手法を活用する。例えば日本語であれば、女性の言葉については女性語を用いる。ことわざ、格言等では七五調を用いる等。

彼はドイツ語訳聖書、オランダ語訳聖書を例証として出しているため、彼は、これらを、ある程度、文学的翻訳として成功した例としてみていると思われる。

なお、オランダ語訳聖書は英語やドイツ語の Good News Bible よりもかなり直訳に近いしており、また、Good News Bible という名を冠していない。しかしながら、de Blois (2001) によれば、ナイダ的方法、functional equivalence（機能的等価）の手法を用いたとのこと

である。確かに、本文を見ると、functional equivalence と思われるものもところどころに見ることができる。

オランダ語訳聖書の文学性について、ここで十分な検討は困難であるが、一つ、容易にわかることがある。それは、韻文の部分において、be 動詞を省略した表現が見られることである。すなわち、日本語で言えば「その人は幸い」とか、「時は金」というような、いわゆる不完全文による表現である。そのためか、箴言やコヘレト（伝道の書）の全体の語数は、ドイツ語訳よりも少なくなっている（オランダ語はドイツ語に近い言語である）。このような訳し方も、文学的翻訳の一つの方法と見てよいであろう。

ナイダも Wendland も、自分たちの主張する翻訳法は、すべての（聖書）翻訳において必ず導入されるべきものであるとは主張していないし、また、複数訳の存在の意義も認めている。それと同時に、自分たちの主張する翻訳法のメリットも当然、主張している。また、自分たちの主張する翻訳法は、聖書の翻訳に限ったものではなく、聖書以外についても適用できるものであると述べている。

ここで、ナイダと Wendland の2つの方法は両立するものか、競合するものかということも確認しておくべきであろう。ある程度競合する（すなわち、一方に力を注ぐと、他方がそこなわれる）ということは Wendland 自身も認めている（Wendland 2004, p. 298）。また北村（2012a）もこれらが競合することについて述べたものである。しかし、共存が可能であるということを Wendland もナイダも認めている。また、2つの方法が同一方向をとる場合もある。たとえば、ナイダ的翻訳法によって訳された日本聖書協会共同訳をみると、手紙の中では、「ごきげんいかがですか」（ヤコボス 1:1）とか、「首を長くして」（コリント 1、16:11）といった言い方も出てくる。（もちろん文学的かどうか、どの程度文学的かということの認識については、個人差もあることは認めるべきであろう。）ナイダの手法と文学的翻訳が、あるときは正の相関関係、あるときは負の相関関係になるというこの現実はどう説明すべきであろうか。それには、例えば、知育と体育の関係というものを見てみてもよいであろう。知の面での教育にあまり集中しすぎると、体の弱い青年をつくることになる。しかし、あまり体が弱ければ、頭脳も十分には働かないであろう。知育、体育の同時進行が可能であり、また好ましい。

2つの翻訳法の共存の例、すなわち、機能的等価を導入してわかりやすくしたにもかかわらず、文学的な訳を目指したものとして、ドイツ聖書協会訳聖書があり、また、これよりも多少ともナイダ的方法を抑えて、芸術性を追求した訳としては、NIV とオランダ聖書協会訳がある。そして、現在英語圏で聖書翻訳の中で最大のシェアを持つのは、もはや欽定訳ではなく NIV である。また、ドイツ聖書協会訳も高く評価されている。（現在、日本聖書協会では、聖書の新しい訳が進行中であるが、絶えずドイツ聖書協会訳との照合をしているとのことである。）また、オランダ語聖書はベストセラーとなった。現在、聖書翻訳のトップを進んでいるのはもはやアメリカでも、イギリスでもなく、ドイツ、オランダの時代となった。（日本ではオランダから聖書印刷用の紙を輸入しているほどである。）

また、視覚的な美しさ、面白さ(芸術性)についても、多少言及しておきたい。最近では、

聖書の韻文の部分の訳は、普通の詩のように、少しずつ改行して（例えば英語であれば数語ないし 10 数語で 1 行として、意味の切れ目のところで適当に改行して）訳するのが普通になってきた。しかし、英語の *Good News Bible* を見ると、大体 2 段組になっているので、詩の 1 行が入りきれず、そのため、例えば詩篇 46 編を見ると、

God is our shelter and
Strength,
always ready to help in times
of trouble.

のようになっている、かなり見苦しい。しかし、ドイツ語訳になると、2 段組ではあるが、各行にかなりの字数が入るようになっているため、詩の 1 行が途中で切れるところがほとんどなく、きれいになっている。さらにオランダ語訳になると、散文の部分は 2 段組、韻文の部分は 1 段組という、大胆な方法をとっている。そのため、韻文の 1 行が途中で切れることがなく、きれいである。

なお、*Contemporary English Version* では、2 段組にしたものと、1 段組にしたものの両方が出版されている。

また、オランダ語聖書は、2 色刷りであり、ページ数や小見出しは赤い字になっている。赤い字の使用を美しいと感じるか否かは、人によって異なるであろうが、赤い字が視覚に訴える力を持つことは事実であろう。

Wendland はかなり視覚面についても言及している。例えば、訳文の一部で小さい字を使ったり、あるいは大文字、イタリック、太字のフォントを使うこと等も提案している。また、韻文の翻訳においては、その内容によっては、例えば、1 行目と 5 行目が対応し、2 行目と 4 行目が対応するような場合には

```

○○○○○○○○○○
  ○○○○○○○○○
    ○○○○○○○○○
      ○○○○○○○○○
        ○○○○○○○○○

```

のように行頭をずらして改行するのもいいのではないかと提案している。

一般に視覚面での配慮は読みやすさを目的としている場合が多いのであるが、読みやすさと芸術性の間に明確な線を引くことが困難な場合も多い。芸術としてはかなり初歩的なレベルであると思われるかもしれない。しかし、活字（フォント）の種類、途中での活字（フォント）の大きさや種類の変化、絵文字の使用、余白の取り方、レイアウト等に注意して印刷され、出版された本は 1 つの芸術品と言えるほどである。

3. Beekman のレトリック操作

Wendland 以前にも、Beekman (1974) が文学的翻訳について扱っていることは述べてお

かなければならない。この著は聖書翻訳の手引き書の1つであり、ナイダの理論、方法論にのっとったものであるが、この著の特徴の1つは、聖書のレトリックの書き換えを提唱していることである。すなわち、聖書中のレトリックで、直訳することが好ましくないものは書き換えようというアプローチである。この点からみると、この著は、聖書のレトリックについて詳しく述べた Bullinger (1968) を、翻訳者用に書き換えたものでないかとも言えるほどである。レトリックの書き換えは紛れもなく、文学的操作である。

4. 中国の文質論争との比較

中国の仏典翻訳史においては、紀元 220 年ごろ、文質論争という論争が起こった。これは非常に長期にわたったものであり、かなりの量の記録が残っていることも考えると、翻訳に関する世界で最も大きな論争と言ってもよいであろう。これは直訳すべきか否かの論争と解釈する者も多いようであるが、単一の文献ではなく、2, 3の文献にあたってみれば、研究者によって解釈が異なることを容易に知ることができる。この論争は意味を忠実になぞった訳を目指すか、美文訳を目指すかという論争と考えるべきであろう。このことについては既に北村 (2012b) で詳細に論じたため、ここでは繰り返さないが、意味の訳か美文訳かという論争と解釈しないかぎり、そこで扱われている文、質とは何であるか、定義できなくなってくることは述べておきたい。

仏典翻訳においては、まず、意味を忠実に訳した「質訳」と呼ばれる訳が現れる。(いわゆる逐語訳があまり問題にされなかったのは、仏典翻訳が、口述筆記訳という方法で訳されたことにもよるであろう。) 質訳は美しさが伴わないということで、文訳、すなわち美文訳を唱える人たちが現れた。これはナイダ以後の動きとも共通するところである。

なお、ナイダの目指した訳と、質訳をここで対応させているわけであるが、両者が全く同じというわけではなく、異なっているところもある。すなわち、ナイダはわかりやすい訳をめざしたが、質訳は必ずしもわかりやすい訳をめざしてはいない。サンスクリットから漢文になったという意味ではわかりやすくなったわけであるが、以下の点では、わかりやすくなったとは言えない。

1. 色、法、空などの語に新しい意味を持たせた。
2. 菩薩、三昧等、外来語が導入された。
3. 魔、僧等、新しい漢字が作られた。
4. 仏教用語、固有名詞において、かなり使用頻度の少ない漢字を用いた。

聖書翻訳において、訳文に文学性がなぜ必要とされるかについて、Wendland (2004, p.5 等) は、「文学性というものはコミュニケーションの手段だからである」と説いている。これに対して、文心雕龍 (ぶんしんちょうりゅう) (情采第三十二の賛の部分) においては、「文学性というものがあってこそ、遠くまで伝わる」と説いている。なお文心雕龍は一般に仏教関係の文献としては扱われないが、文質論争と同時代に書かれたものであり、特に文学ということについて論じているため、仏典翻訳史の研究において、無視することの出

来ない文献であり、また文質論争の研究にとっても重要な文献である。

なお、文質論争において、後に文訳（美文訳）を主張する人たちが現れるのであるが、それと同時に、中国語はすばらしい言語であるとの主張も現れてくることは注目すべきである。まず、仏典翻訳原則を述べた（？）五失本三不易（ごしつぽんさんふえき、ごしつぽんさんふい）といわれているものがあり、その現代日本語訳を中嶋（1997, p.88）や北村（2008, p.121）で見ることができるが（有名なものなので、インターネットでも容易にその内容を知ることができよう）、そこにおいては、漢民族は文雅な文を好むとある。すなわち、中国語が文学性を備えた言語であり、また、漢民族が文学を好むがゆえに、美文訳をすべきであると主張されている。また、出三蔵記集という文書の同異記とよばれる部分を「国訳一切経 和漢撰述部 31」（2000, p.13 あるいは 19）、北村（2008, p.18）で見ることができるが、そこにおいては、（この部分は劉勰が書いたと思われるが）、中国語はサンスクリットに少しも劣るところのない、すばらしい言語であるとの言及がある。美文訳を否定し、質訳を主張した支謙は漢民族ではなかったことも、忘れてはならないであろう。中国語を母語とする人たちの多くは、中国語のすばらしさに誇りを持っていないに違いない。

聖書翻訳について論じたナイダが宣教師としてメキシコに滞在した期間に比べて、Wendland がアフリカに居住した期間はかなり長かったのではないかと推測される。彼はアフリカの言語の研究も行っている。長く住めば住むほど、その土地のよさがわかってくるものである。多くの日本人にとって、アフリカの奥地やパプア・ニューギニアの人たちは野蛮、無知、無学、文明から取り残された人たちというイメージが強いかもしれないが、それは現地での経験に裏付けられた考えではない。その土地に長く居住し、言語を深く知ることによって、その言語の芸術的可能性というものも深く認識するようになるはずである。

発展途上国の民族はいわゆる文明国の民族よりも知的に劣っているという考えを、ある程度ナイダ自身も持っていたように思われる。もしそうでないとすれば、聖書を翻訳する際、なぜ原文よりもやさしくしようとしたのか、時によっては過度なまで *dynamic equivalence* によろうとしたのか、疑問が残る。

これとは反対に、文心雕龍を書いた劉勰の漢民族としてのプライドはすさまじいもので、「世界に孔子ほど偉大な人物はいない」とまで言っている（文心雕龍、序志第五十）。このような言及は仏教の教義とはなじまないであろうが、民族のプライドは、美文訳の主張、美文訳の追求とも決して無関係ではないであろう。

さて、文質論争がどのように終結したかを述べなければならない。一般には、文訳（美文訳）派が質訳派に勝利したと受け止められている。しかし、もし十分注意して仏典翻訳史を見るなら、2つの見方があったと言わざるをえないであろう。すなわち、一つは、文訳を質訳よりもすぐれているとするものであるが、これは先にあげた五失本三不易にあるものである。もう一つは、翻訳は文、質2つが伴ったものでなければならないとする考えであり、これは先にあげた出三蔵記集同異記の中にあるものである。すなわち、原文の意味を十分に訳出し、さらに文学的要素も伴ったものとならなければならないとするもので

ある。これは、聖書翻訳において、ドイツ聖書協会訳のように、ナイダ、Wendland の両者を十分に両立させようとしたものがある一方で、ナイダ的傾向が比較的少ないオランダ語訳や NIV のような美文訳志向の訳があることも類似性が見られ、興味深い。

5. 八備十条との比較

さらに時代が下ると、仏典翻訳について記したものとして、八備十条といわれるものが残っているが、これについては北村 (2013) で引用し、論じたため、ここで改めて引用することは避ける。八備の部分は精神論であり、仏典翻訳者は漢民族の古典に親しむべきことが記してあることを述べておけば十分であろう。十条については、芸術的な訳についての言及がかなりあるため、文心雕龍と照らし合わせてその原文を復元したものを改めて以下にあげる。

翻訳にあたっては、訳文の美しさにも注意を払わなければならない。会話の部分については、言語によって異なった慣例があるため、それにしたがって訳すべきである。

(例えば 是か非かを問う質問では、英語の場合は yes, no なしに答えることはほとんどないが、日本語の場合は、「はい」、「いいえ」といった言い方が含まれていなくともよい。) 訳文は読んで響きのよいようなものにすべきであるが、原文の意味を変えてはならない。経綸、歌頌、呪功といったジャンルの翻訳においては、それぞれのジャンルにふさわしい方法で翻訳すべきである。ジャンルが異なれば翻訳方法も異なる。誇張表現においては、訳文においては、どの程度の誇張にするか、よく考えるべきである。誇張表現を用いることによって、訳文は文学的になるが、過度の誇張は禁物である。原文に、何らかの引用や言及がある場合には、もし引用、言及されているものがよくわからない場合には、その方面に詳しい者に聞いて、助言を得るべきである。あるいは、みずからよく調べるべきである。(例えば、原文において当時の政治や演劇等についての言及があった場合、そのような方面の知識がないと、何のことかさっぱりわからないということにもなりかねない。) そして、訳文において、どのような字形、発音の漢字を使用するかにも注意を払うべきである。例えば画数の多い漢字がたくさん並ぶのもよくないし、また、同じような発音の漢字が3つ、4つと連続して出てくることも好ましくない。

これはあくまで推定による復元であり、仮説の域を出ないと言われるかもしれない。しかし、まず第一に、八備十条が文心雕龍をもとにしての推定は、1つや2つの類似点によったものではなく、少なくとも数項目の類似点をもとにしたものである。また、十条の部分は現在、項目名しか残っていないが、十条が何について扱っているかは、その項目名からも知ることができることは述べておきたい。上記の十条の推定原文から、以下の特徴を見て取ることができる。

1. 全体として芸術性（美）について扱っている。
2. ジャンルによる違いに注意して訳すべきであると主張している。（なお、各ジャンルによる文章の特徴の違いについては、既に文心雕龍において、詳細に論じられている。）
3. 視覚的印象についても取り上げている。

ジャンルによる違いに注意して訳すべきことは、オランダ語訳聖書においても強調されていることである。特に旧約聖書の箴言の部分のオランダ語訳の語数がドイツ語訳よりもかなり少なくなっていることは、格言集というジャンルに注目して、ドイツ語訳よりも短い形にまとめたためにほかならない。

「十条」が視覚的印象について言及していることは、漢字という文字の性格にもよるものと思われる。最近の聖書の翻訳においても、視覚面にも注意が向けられている。（古い時代の聖書も、絵文字を用いたり、飾りをつけたりした豪華なものがあった。）

仏典翻訳においては、視覚的印象については以下のことに注目すべきであろう。

1. 5字句、7字句の連続が非常に多い。これは音読したときの韻律美のみならず、書いたときの整然としたありさまも念頭においた翻訳方法であったと思われる。
2. 菩薩、三昧、仏等々、使用頻度のかなり低い漢字、画数の多い漢字が時々用いられている。このような漢字は、読者の注意を引くものであったことは明らかである。（仏という漢字は、現代ではかなり使用頻度が高いが、現代でも「仏陀」あるいは「フランス」を略したものとして用いられることが多く、それ以外の使用例は固有名詞以外にはほとんど見られない。この漢字が使われ始めたころ、これはそれまでにほとんど目にすることがなかったものであり、かなり強い印象を持ったものであったと推測される。）

6. 近代、現代の中国翻訳論との比較

それ以後の中国翻訳史については、まだ研究の不十分なところもあり、また、評価の定まらないところもあると思われるため、近代以後に目を向けてみたい。

まず、中国の近代・現代翻訳論の父ともいえるべき嚴復に目を向けるべきであろう。彼は翻訳の満たしているべきものとして、信、達、雅の3つをあげている。これが何を意味するのかが問題であるが、永田（1997）によれば、「偽らぬこと、意を尽くすこと、文章表現の美しさ」となっている（日華翻訳雑誌（2008）に再録）。また、武吉（2007, p.10）によれば、「忠実に、なめらかに、美しく」となっている。3つのうち最後にあげているとはいえ、翻訳は美文でなければならないと嚴復が主張していることは注目に値する。彼はそのためどうすればよいか、詳しい方法を提示することはなかった。しかし、彼の影響力は絶大である。彼の説は現在でもかなり評価されているが、批判もないわけではない。また、彼の説を修正発展させようという者もいる。

次に、ノーベル賞級の作家とも言われる林語堂についてふれなければならない。彼の翻訳論「翻訳を論ず」の全文の日本語訳を林語堂（2003）で、また日華翻訳雑誌（2008）で見ることができるが、彼は最初から、「翻訳とは芸術である」と主張している。また、芸術

作品は翻訳できない」とも主張している。すなわち、この2つをまとめると、まず原文の芸術性を把握し、そして翻訳においては機械的な方法によらず、新たな芸術再創造の努力をしなければならないということであろう。文学的翻訳のガイドブックを作ることなどできないという立場であると思われる。

その後、許淵衝は「翻訳的芸術」の中で、三美（意美、音美、形美）の翻訳における再現について論じた。

劉宓慶は美感、レトリック、スタイル、韻律、形式美等の再現を目標とする翻訳論を主張した。林語堂の場合とは異なり、このように項目に分けて挙げてあると、テクニク的に十分再現可能なものもあるはずだと、希望を持たせる翻訳論である。例えば、韻律の再現ということであれば、日本語訳の場合であれば、五七調になるように、訳語の選択を工夫しながら訳文を作ればよい。形式美の翻訳についても方法を見出すことができそうである。

7. 「実用翻訳美学」

以上にあげた以外にも、2, 3人、関係のある人物がいるが、ここでは省略し、最後に傳仲選の「実用翻訳美学」という著作をあげてみたい。

これは1991年に上海外語教育出版社から出版されたものであり、Wendland (2004) の数分の1の量しかない短いものである。Wendland (2004) は極めて学問的性格の強い文献であるとの印象を受けるが、これは、「実用翻訳美学」という名前からも推測されるとおり、極めて実用的な内容の文献である。参考文献のリストはなく、また、英文中国語訳、露文中国語訳の用例が非常に多く、見出しと用例だけからでも、全体の流れをつかむことができるほどである。方夢之（編）(2011) にもこの著書が見出しとしてあげてあり、また、中国翻訳通史においても、この文献の説明に4ページ近くのスペースをさいているほどである。中国においてはかなり高く評価されているとの印象を受ける。

内容の概略を述べると、まず起点言語 (source language) のレトリックについて、繰り返し、省略、隠喩、誇張等、各項目ごとにとりあげ、次に受容言語 (receptor language) のレトリックについても、各項目ごとにとりあげている。その後、翻訳できないものについて論じ、次に原文と読者の間の距離について論じ（スコポスのアプローチについての記述が含まれている）、次に、翻訳のプロセスを記し（ナイダの記しているところになったものか）、その後、翻訳の正確さ、忠実さとのかねあいについて論じ、その後、翻訳方法について記している。この翻訳法の部分は、ナイダの文献にあるものもかなり含まれている。簡単にまとめると、1. 補足的語句を加える。2. 原文にあっても、翻訳で不要になった語句を取り除く。3. 名詞を動詞に変える等の変換をする。4. 語順を変える。5. 否定、肯定を逆にする（恥じることはない→誇りに思う）。6. 二つの文を一つにする。7. 一つの文を二つにする。以上の7項目である。この「翻訳方法」の部分は、筆者の独創性が現れており、その意味からも最も重要なところであろうかと思われる。この部分については、武吉 (2007,

pp.61-76) が日本語でまとめている。ただ、順序や命名法が違っているところがあるため、武吉は実用翻訳美学のこの部分をそのまま紹介したわけではなく、その影響を受けて書かれた翻訳の手引書を日本語でまとめたものではないかと思われる。

この「実用翻訳美学」を見ると、ナイダ以後の聖書翻訳の動向をまとめたものではないかとの印象さえ受ける。すなわち、実用翻訳美学の第2章の第1節は原文言語のレトリックが列挙されているが、これは Bullinger (1968) が聖書のレトリックを網羅的に述べているのを思い起こさせる。またこの章の第2節は読者言語のレトリックを列挙しているが、これは John Beekman (1974) が聖書のレトリックを読者言語用に変更を加えることを提唱していることを思い起こさせる。そして既に述べたとおり、翻訳方法の部分では、ナイダの提唱した方法も出てくる。

8. まとめ

欧米においても、中国においても、美に対する欲求、翻訳における、あるいは文章執筆における美あるいは文学性の実現のための営みに類似性、共通性が見られるが、これは人類の共通性というところから考えても、当然といえば当然である。しかしまた、違ったアプローチが見られることも事実である。例えばナイダは芸術家というよりは言語学者であり、文学性の実現についてほとんど取り扱うことができなかった。また、Wendland は、文学性とはコミュニケーションの手段であると言っている。

一方、中国においては文心雕龍という著が古くからあり、これは多くの文献を参考にして書かれたことから、学問的文献と言いうるものであるが、しかし、言い伝えによる宇宙の起源、文字の起源にも言及し、宗教的ともいえる響きを持っている。美というものは自然の中に実現されているものであるゆえに、文章創作にあたっては美を実現していくことが道であるという主張も、宗教的な響き、あるいは文章道とでも言うべき響きを持っている。中国では古くから美に対する関心が強く、論語を見ても、孔子が音楽を好み、音楽について論じたことが書かれているほどである。「礼」というものも、美の一つの表現であったに違いない。近現代の翻訳論形成の時代になっても、最初から、翻訳においては美の実現が必要であると唱えられてきた。中国のこの長い美に対する関心の伝統は、翻訳論の研究においても、見過ごすことのできないものであろう。また、中国の近現代の翻訳論は、諸子百家の時代を彷彿させるものがある。アプローチの仕方が異なるところは注意しなければならないが、しかし、中国の翻訳論の成果は、やはり取り入れていきたいものである。

美、あるいは芸術というものは、学問的には、極めて扱いにくいものである。しかし科学というものは、存在するものすべてを研究対象としてきた。これからどうなるのか、どこまで研究が可能なのかはわからない。しかし現在までの研究成果はやはり、実用に供しうるものであると言ふべきであろう。

.....

【著者紹介】

北村彰秀(KITAMURA Akihide) モンゴル聖書宣教会所属。モンゴル側との協力のもとに聖書モンゴル語訳の働きにかかわる。また、東洋における翻訳の伝統の研究、聖書翻訳との比較を行い、あるべき翻訳のすがたを探る。

連絡先： Email: a_kitamura07@yahoo.co.jp

.....

【取り上げた聖書の訳】

Deutsche Bibelgesellschaft (1997). *Gute Nachricht Bibel*.

Deutsche Bibelgesellschaft (2000). *Gute Nachricht Bibel (Revidierte Fassung)*. (ドイツ聖書協会訳、ドイツ語訳聖書)

Nederlands Bijbelgenootschap (2004). *Bijbel — Die Nieuwe Bijbelvertaling, Haarlem*. (オランダ聖書協会訳、オランダ語(訳)聖書)

【付記】

同じ訳が2つ以上の出版社から出たり、時とともに本文にわずかな修正を加えて出たり、復刻版が出ることも少なくないため、英語訳、日本語訳については特にここにはあげず、ドイツ語訳、オランダ語訳のみ記した。

また、何語の訳でも、版の大きさ、注の有無、表紙のデザイン、活字の組み方等、いろいろなものが同時に、あるいは前後して出ることが少なくない。それらは同一出版社のものであれば数字やアルファベットを用いて区別しているようであるが、ここではそれらの区別は特に必要ないと思われるため、記さなかった。また、本文で用いた略称は()内に記した。

聖書本文からの引用はページ数によらず、旧新約各書の書名、章・節の番号によって示した。また、文心雕龍からの引用もページ数によらず、章名と章の番号によって示した。

【参考文献】

Beekman, John and John Callow (1974) *Translating the Word of God*. Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House.

Bullinger, E. W. (1968) *Figures of Speech Used in the Bible — Explained and Illustrated*. Grand Rapids, Michigan: Baker Book House. (Original work published 1898)

Cheung, Martha P. Y.(ed.) (2006) *An Anthology of Chinese Discourse on Translation vol. 1: From Earliest Times to the Buddhist Project*, Manchester, St. Jerome Publishing

de Blois, Kees F. and Tamara Mewe (2001). Functional Equivalence and the New Dutch Translation. *The Bible Translator Vol.52, No. 4*, 430-440.

Wilt, Timothy (ed.) (2003) *Bible Translation — Frames of Reference*. Manchester, UK & Northampton MA: St. Jerome Publishing.

Wendland, Ernst R. (2004) *Translating the Literature of Scripture — A Literary-Rhetorical Approach*

to Bible Translation. Dallas, Texas: SIL International.

- ローレンス・ド・フリス (2006) 「聖書翻訳と信仰共同体」『国際聖書フォーラム 2006 講義録』
日本聖書協会
- 船山徹 (2013) 『仏典はどう漢訳されたのか』 岩波書店
- 河野訓(2006) 「初期漢訳仏典の研究——竺法護を中心として」 皇學館大学出版部
- 北村彰秀(2008) 「続 東洋の翻訳論——学者基本典を中心として」 個人出版
- 北村彰秀(2010) 「東洋の翻訳論Ⅲ——蔵蒙対訳『学者基本典』を出発点として」 個人出版
- 北村彰秀(2012a) 「翻訳のジレンマ——翻訳について論じる前に確認しておきたいこと」 [Online]
<http://www.honyaku-tsushin.net/extra/2012.01kitamura1.pdf> (2014年8月15日)
- 北村彰秀(2012b) 「文質論争について——ナイダ以後の動き、日本における論争も合わせて」
[Online] <http://www.honyaku-tsushin.net/extra/2012.01kitamura2.pdf> (2014年8月15日)
- 北村彰秀(2012c) 「東洋における翻訳教育の伝統から (3) ——仏典翻訳時に用いられた辞書、
文法書、手引書等」 [Online] <http://www.honyaku-tsushin.net/extra/2012.01kitamura4.pdf> (2014
年8月15日)
- 北村彰秀 (2013) 「仏典漢訳史における劉勰と文心雕龍」『翻訳研究への招待』 No.9, 19-28 日本
通訳翻訳学会
- 「国訳一切経 和漢撰述部 31 史伝部一 出三蔵記集 改訂三版」(2000)大東出版社
- 興膳宏訳注(1968) 「陶淵明 文心雕龍」(世界古典文学全集 25) 筑摩書房
- 興膳宏(1988) 「『文心雕龍』と『出三蔵記集』——その秘められた交渉をめぐって——」『中国の
文学理論』(pp.113-242) 筑摩書房
- 目加田誠訳注(1974) 「文心雕龍」『中国古典文学大系 54 文学芸術論集』平凡社
- 水野弘元(2004) 「経典はいかに伝わったか——成立と流伝の歴史」 佼成出版社
- 永田小絵(1997) 「中国近代の翻訳論」『通訳理論研究』第12号、通訳理論研究会
- E. ナイダ他著、沢登春仁他訳 (1973) 『翻訳——理論と実際』 研究社
- E. ナイダ著、成瀬武史訳 (1972) 『翻訳学序説』 開文社出版
- 中嶋隆蔵編(1997) 「出三蔵記集 序巻訳注」 平樂寺書店
- 日華翻訳雑誌 (2008) [Online] nikka.3.pro.tok2.com (2014年8月15日)
- 横超慧日(1979) 「中国仏教初期の翻訳論」、横超著『中国仏教の研究第一』法蔵館
- 横超慧日(1983) 「仏教経典の漢訳に関する諸問題」、東洋学術研究通巻 105号 (22巻2号)、東
洋哲学研究所
- 丘山新(1983) 「漢訳仏典の文体論と翻訳論」、東洋学術研究通巻 105号 (22巻2号)、東洋哲学
研究所
- 丘山新(1996) 「漢訳仏典と漢字文化圏——翻訳文化論」 シリーズ東アジア第五巻『東アジア社
会と仏教文化』春秋社
- 林語堂著、永田小絵訳(2003) 「翻訳を論ず」、獨協大学外国語学部言語文化学科紀要マテシス・
ウニウェルサリス 2003年11月
- 島先克臣 (2011) 「聖書翻訳の今」『聖書セミナー』 No. 15 : 97-122. 日本聖書協会

- 武吉次朗（2007）『日中中日翻訳必携』日本僑報社
馬祖毅等（2006a）「中国翻訳通史 古代部分」湖北教育出版社
馬祖毅等（2006b）「中国翻訳通史 現当代部分第4巻」湖北教育出版社
方夢之（編）（2011）『中国訳学大辞典』上海外語教育出版社
傳仲選（1991）『実用翻訳美学』上海外語教育出版社